2025年1月26日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

まず、御名を讃えることを

［マタイによる福音書6章5～15節］

「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思い込んでいる。彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。だから、こう祈りなさい。

『天におられるわたしたちの父よ、
御名が崇められますように。

御国が来ますように。

御心が行われますように、
天におけるように地の上にも。

わたしたちに必要な糧を今日与えてください。

わたしたちの負い目を赦してください、
わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。

わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。』

もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。」

[1]　主の祈り―世界を包む祈り

　今日の聖書箇所は、マタイによる福音書6章から、「主の祈り」と呼ばれる祈りが記されている箇所です。「主の祈り」は、とても一回でお話しできる訳ではありません。本当でしたら1節づつ丁寧にその祈りの奥行きを味わって行きたいところですが、そうもいきませんので、今回は特に私が恵みに思わされたことをお話し、分かち合わせて頂きたいと思います。

　「主の祈り」のことを、ある人は「世界を包む祈り」だと表現しました。地球は丸いですけれど、その私たちの世界をこの祈りが覆っていると言うのですが、本当にそうだと思います。それは礼拝の場だけじゃない、個人的な祈りの中でも、平和な所であっても、或いは戦地の中にあっても、イエス・キリストが「あなたがたは祈るとき、こう祈りなさい」と言われたこの祈り、通称「主の祈り」を、途絶えることなく、日本だけでなく、誰かが祈っているのです。そして、これは「我ら」と、祈る祈りです。個人的に祈っていても「我らの父よ」と祈っているのです。私たちはこの祈りを祈る時、それは、私自身のためでもあるけれども、同時に、あの人この人、或いは、知らない誰かを支えている祈りにもなっている、そう言って良いと思います。逆も然りでしょう。誰かが祈る「主の祈り」によって、きっと私たちも支えられているのですね。

[2] 主イエス・キリストご自身の祈りを私たちに

　私は週報の裏面にも転用させて頂いた、日本基督教団・代田教会牧師の平野克己牧師が書かれた『主の祈り イエスと歩む旅』（日本キリスト教団出版局）という本がとても素晴らしい本で、沢山ご紹介したいくらいなのです。その中で、特に私がハッとさせられたのは、「主の祈り」というのが、もともと他ならぬ主イエス・キリストご自身の祈りであった、ということです。そしてその‟主ご自身の”祈りを、私たちも自分自身の祈りとすることが出来ている！ということです。

その本のはじめの方にこう記されています。

**「礼拝で主の祈りを祈るとき、わたしは不思議な思いになることがあります。映画やテレビドラマで、よくこのような場面があります。登場人物が自分宛の手紙を朗読しはじめる。すると、そのひとが朗読しているその声に、手紙の差出人の声が重ね合わされる。そして、ついには差出人の声だけが響き出す。主の祈りを礼拝で祈るときに味わう不思議な思いとはそれと似た思いなのです。礼拝の中で「天にまします我らの父よ…」と祈るとき、祈りの音葉をともにするさまざまな声が問こえてきます。そして、その声の向こう側から、もうひとつの声、弟子たちに主の祈りをお教えになった主イエスの声が聞こえてくる。そしてついには、その主イエスの声をなぞりながら、わたしたちが祈っているのです。」**

―私はこのイメージはとてもリアルなものだと思うのです。「主の祈り」は、なんだかお題目のようで実感が伴わず、どこか自分の心とは遠い感じを持って声を合わせてしまうということが皆さんあるのではないかと思います。私自身そうでした。でも、それでもいいんじゃないでしょうか？これは「わたしについて祈っておいで」と招いて下さるイエス様に、言ってみれば「手引きされて」祈る、そういう祈りの言葉なのですから。言い方を変えるなら、もともとの私たちの中からは出てこない祈りなのです、「主の祈り」は。ですからキリスト教の幼稚園の子供たちが古い言葉で「天にまします…」と祈っても、この祈りは、主が手引きし、分け与えて下さった祈りである以上、全然空しくない祈りです。むしろイエス様と声を合わせて祈っている、と言って良いのだと思います。

[3] 私から始める「赦し」

 先ほど私は「主の祈り」はお題目のようで実感が伴わないことがある、と言いましたけれども、いや、ここは良く分かると言いたくなる部分は、「我らの日用の糧を今日も与えたまえ」と「我らに罪を犯す者を我らがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ」の所だと思います。私たちは生身の人間です。その中でいつも課題になるのは、経済問題と人間関係ですね。食べること・つまり体の健康のことと、人間関係、つまり精神の健康のこと、と言っても良いかもしれません。‟神様どうぞ、日々の心配事を心配し過ぎないで済むように守って下さい。そして、心が健やかであるために、あなたの大きな愛と許しを頂いて生きていることを忘れないようにして下さい。あの人のためにも、主よ、あなたは十字架にかかって死んで下さったという事実に、私自身も許されたように、私もあの人を許していくことが出来ますように”との祈りに導かれていかれるのではないでしょうか。「平和」というのは、単なる穏やかということではないでしょう。主の祈りの言葉は凄いと思います。まず私の方から赦すのです。「わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように」と。礼拝でも「我らが赦すごとく」と祈りますね。私たちは相手の出方次第と思ってしまいますが、そうではなく、まず私が始めるのです！なぜ？主がまず私たちのことを許して下さったからです。あなたはその愛を知っているじゃないか、と。これは簡単じゃないということは私たちは知っています。ですから主は私たちを励まして下さるのだと思います。主ご自身が、私たちのために祈っていて下さっています。聖霊を注いで下さる。そして弱い私たちに「誘惑に遭わせず、悪しき者から救ってください」という祈りを与えて下さっています。

[4] 第一の祈りは、神様をほめ讃えること。

そして私は、今回準備をしながら、一つの大切なことに気が付いたのです。今お話した地上の事柄について祈る前に、主は、父なる神様を心に留めて祈ることを命じておられる、ということです。―「天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。御心が行われますように」です。どうでしょう。これは生まれつきの私たちの中からは出てこない祈りではないでしょうか？天におられる神様ってどのような方なのか、顔も姿も分からない。大体、旧約聖書によれば、この「有りて有る者」には誰も近づけません。あのモーセの燃える柴の物語を思い起こします。神様と人間は超絶離れている訳ですよね？そのお方のことを、「天にましますわれらの父よ（お父さん！）」と親しく呼ぶことから始まって、神様ご自身は、まず、何とあなたによって、御名が崇められること、ほめ讃えられることを望んでおられる、ということをイエス様は語っておられるのだなと思いました。

ここを読んで、私は、一日の初めを神様の御名を崇めることから始めているかな？と振り返りました。いや、まず自分のことを祈ってしまいます。今日も一日宜しくお願い致しますと。そして気になる心配事があればそれを祈ります。教会のこと、家族のこと。しかし、要求されている第一の祈りは、神様を覚えることだということです。「御名が崇められますように」。御名が御名として尊ばれますように。誰が尊ぶのですか？私です。そしてあなたによってです！神様が、私たちを通してほめ讃えられることを待っているなど、私は知りませんでした。神様は、きっと孤独が嫌いで、私たちの声を、心を、聴きたいのでしょう。まず神様を覚え、この方に立ち帰る。それが核ですね。そこから始めて、あとは「御国が来ますように。御心が行われますように」と、神様のご支配を信じ、全てをお委ねしたいと思います。この世界を、真実の愛を持って治めていて下さっているお方がいらっしゃるのですから。…そして私たちは、何と幸いでしょう、イエス様を知らされています。本当ならば、神様など要らないと、神様を捨てた私たちなのに、こともあろうに和解の供え物としてイエス様を十字架におかけになり、神様の方から私たちを赦して、御許へと連れ戻して下さいました。この、途方もない愛に私たちに出来ること・求められていることは、何より主の御名を讃えることです。‟あなたあってのこの私です。あなたあってこその私たちの教会です、そしてこの世界です”と。

　「主の祈り」。1分位で祈ることが出来るこの祈りが、地球を、全世界を包んでいます。私たちの今日の主の祈りが、自分だけでなく、誰かを支えるのです。そして、私たちも誰かの祈りに支えられている。凄い世界が、神様によって、イエス様によって出来ています。上手な祈り、長い祈り、言葉を駆使したような祈りが出来なくて良いと思います。主の祈りを自分の祈りにすれば良い。主の祈りは、イエス様が切り開いて下さった大路のようなものかも知れません。ここで、神様と交流しながら、与えられた日々を共に生きて行きましょう。生涯の最後の日まで、一緒にこの祈りを祈り、この祈りに生かされて行きたいです。お祈り致しましょう。

天におられる父なる神様、まず、あなたの御名を崇めさせて下さい。そして、あなたの愛に押し出され、また支えられて、この地上を真実に生きることが出来ますように導いて下さい。主の祈りを祈ることで、‟イエス・キリストを着る”信仰生活を与えて下さい。主よ、どうか、この世界にあなたのみ心が確かに成りますように。み心のうちに、私たちをあなたの道具として下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。